

中国「社会主義」と社会主義論再考

岩林 彪 (IWABAYASHI Takeshi)

私たちは資本主義と呼ばれる経済優先主義の時代に生きて久しい。そして、この 200 年間、それが生み出す社会主義問題に不断に悩まされてきた。ソ連型社会主義体制が生まれた時に、人類はついに社会主義問題を解決する体制を手に入れたと喜んだ。だがそれは、一定の地理的広がりを見せたものの、70 年余りの歴史を刻んで 1990 年代初頭に崩壊してしまった。人々の社会主義への期待は大きく殺されることになった。

その後、社会主義は中国に引き継がれた。私たちは、「社会主義」の旗を堂々と掲げて経済・軍事面で急速に大国化する中国を大いに注目してきた。だが、資本主義体制の下に生きる私たちには、日々当面している社会主義問題を中国「社会主義」がその本質において、つまりその発展形においても解決しうるとはとても思えなかった。それは、ポスト資本主義としての社会主義とも、あるいはバーニー・サンダースを熱烈に支持するアメリカの若者たちが求める「社会主義」とも、通底するものがあるようには思えなかった。

要するに、中国「社会主義」は時代が求める社会主義とは異なるように思えるのだ。とはいえ、両者はいったいどこがどう異なるのか。「中国は社会主義か？」と題したシンポジウムの開催は、そのテーマの設定においてまさに時宜をえたものであった。

私の関心は社会主義にあり、これについては折に触れて発言もしてきたので、シンポジュリストたちの議論をそれなりに受け止めることができるものと思われた。だが、テーマの半分を占める中国については、私の心象は未だに 10 年以上前に陳桂棣・春桃『中国農民調査』やアレクサンドラ・ハーニー『中国貧困絶望工場』などから発せられた心が痛むようなイメージによって占拠されており、この古いイメージのままでシンポジウムの課題設定に向き合うことは軽々に過ぎるのではないかと慮られた。私は、世界的にも注目されているという梁鴻『中国はここにある』を通じて中国社会に関するイメージを更新するとともに、それによって中国「社会主義」の社会主義的性格を再検証してみることにした。

梁鴻のノンフィクション作品は、現代的な高層建築や情報・交通インフラを備え、高度な物質文明に満たされた都市社会の対極に位置しつつも、その人工的で無機質な都市文化が主導する時代の激しい変化にさらされ、30 年ほどですっかり変貌してしまった農村社会の現在地を、そこで幼少期を過ごした著者の脳裏に刻まれている残影と、現にそこに居住する人々が発する言葉から紡がれた現状との落差を通じて淡々と描写したものである。それは奇しくも、陳夫妻やハーニーらが直接間接に描いた世界の 10 年後の姿であった。

私は、中国社会に関するこの新たなイメージを抱いてシンポジウムに臨んだ。

シンポジュリストたちは、経済発展が市場経済の大々的な活用によってもたらされた経済システム（社会主義市場経済）を社会主義経済と認めてよいかという問題から解き起こし、次いでそれが引き起こしているさまざまな問題を念頭において、はたして中国が社会主義の道を歩んでいるといえるのかどうかを問うた。要は、社会主義を目指す政治勢力が国家権力を掌握している以上、市場経済であれ何であれ遅れた経済（土台）を発展させること

ができるなら、その是非は不問に付され、後はそれに応じて社会主義的上部構造を構築すべく国家権力が社会発展を誘導していけばよいということである。ただし、問題は2つあるとされた。いずれも政治勢力にかかわる問題ではあるが、一つは、当該政治勢力が「マルクス主義の正しい理解」に立脚しているかどうかという問題であり、今一つは、市場経済が政治勢力の権力的統制（社会主義的コントロール）を超えて暴走し、資本主義経済へと向かう（体制転換）ことになりはしないかという問題である。

シンポジストたちの議論は多岐にわたったが、私には概ね以上の論点をめぐって議論が行われたように思えた。そして、コーディネーターによれば、中国の現状をどう規定するかでは意見の一致を見なかったが、今後その社会主義的成功を願うものであるという点では一致できたという。つまり、シンポジストたちは、後者の問題について、「マルクス主義の正しい理解」と民主主義の成熟を前提とすることで、あるいは社会主義以前の経済であると規定することで保険を掛けつつ、中国が社会主義的成功のための客観的かつ主体的な条件を備えているという点で楽観的な見通しを示したことになる。

シンポジウムの議論や会場の雰囲気が多分に高揚したトーンに対して、梁鴻の言説は、中国「社会主義」についてまったく異なった色調を奏でる。

梁鴻によれば、改革開放によってもたらされた農民家庭の総収入の増大（若い夫婦二人、そして少し大きくなった子供の出稼ぎ）と農村経済の発展、すなわち生活の安定と経済の豊かさは、本来であれば文化の伝承・発展をもたらすはずなのだが、文化は、伝承という意味でも、個人の精神のレベルでも、あるいは知識の追求という意味でも、断絶と衰退の中にある。断絶は「転換期」と形容されているが、その転換の背後で発生している巨大な破壊力が見逃されている。豊かな自然と本源的に結びついた人間と人間のきずなからなる「村」（故郷・魂の拠り所）は、経済を中心とする集落に取って代われ、特に若い世代の家庭は、みな出稼ぎに出て、村の政治や公共的な事柄にさほど関心を示さず、父母と子供の関係は金銭関係に置き換えられた。総じて、文化的意味における村は内部から崩壊し、ただ形式と物質としての村が残るばかりになった、と。

改革開放がもたらした急速な経済発展は、中国の広大な国土と十数億の人々を明るい未来へと誘うまさに中国「社会主義」の輝かしい成果だとみなされる反面では、このような影の側面を伴っている。問題は、この側面を中国「社会主義」とどのように関わらせて理解するかにある。

梁鴻はいう、「国家は農村の発展をますます重視し、農村に適した発展の道を探す努力を続けている。しかし、非常に不思議なことに、農民は一貫して受動的で消極的な態度で、本当の意味での参加意識を持っていない。政府－村幹部－農民の三者関係は、いつも有機的な統一をなしていない」、と。国家は農村、農民のために「社会主義」を行っているつもりだが、それは村民の支持をうるところとはなっていないのだ（文化茶館がマージャン茶館に転用されるように）。しかも、問題はそこに止まらない。「農村は、単なる改造の対象ではない。まだ残せるものがたくさんあるかもしれない。なぜなら私たちはそこに、民族の奥底にある感情、愛、善、純朴さ、素朴さ、肉親の情などを見出すことができるからだ。それを失うと、じつに多くのものを失うことになる。おそらくこうした頑固な農村と農民根性が存在しているからこそ、民族の個性、独特な生命のあり方と感情のあり方も、いくらか保存できるのであろう」という梁鴻の言葉は重く響く。民族の個性、独特な生命と感

情のあり方にもとづかないで、はたして社会主義は成立するのか。しかも、それを消失させつつある「社会主義」とは、いったいどのような社会主義か。

そもそも「中国は社会主義か？」という問題は、梁鴻の提起した問題をも視野に入れて初めて解ける問題ではないのか。そうして初めて、それは私たちが当面する社会主義問題をも射程に収め、また時代が求める社会主義とも重なり合うことになるのではないか。

人は、市場には心がないといい、経済が人間性を毀損し、社会を破壊しているという。私たちが苦しめている社会主義問題の核心はまさにここにある。それは、社会主義的にしか解けない問題、社会主義にして初めて解ける問題なのだ。私たちはこの問題を解くために資本主義経済、経済優先主義に立ち向かうことになるが、その際私たちが依拠するのは私たちが人間として生み、育て、そしてその死を受け入れてくれる社会、人間として発達させてくれる固有の社会システムである。私たちは、経済主義の浸食から私たち自身の人間性と社会システムを守るために、政治システムの中で民主主義的活動に参加し、そこでの意思決定（法律、規則等）をもって経済システムに働きかけ、改革を迫っていく。

中国では、社会主義はどこから生まれ出るのか。梁鴻が言うように、改革（強力な近代化の渦）の中で、民族の性格をなす独特な個性と資質を育んだ伝統的文化を否定する思考が無限に拡大され、政治化されてきたのだとすれば、人類の名において普遍的な意義をもつ（だからこそ私たちはかつてそれに熱い眼差しを注いだ）中国固有の社会主義は、その生成基盤を著しく空洞化させていることになる。残すは、政治勢力それ自体が社会主義の発信源としての役割を果たし続ける道であろう。だがそれは、発信源がすでに組織の腐敗と官僚制の弊害に蝕まれており、また大きく経済主義化している社会の支持をうるのがますます困難になる状況下では、ただひたすら経済主義の道を邁進して経済成長を持続させ、それが生み出す経済余力を社会主義問題への対処（社会主義）のために投入し続けざるをえない道である。この場合の社会主義は、多分に「見知らぬ」「個人の」都市文化モデルを母体とすることになり、その未来は限りなく不透明である。

梁鴻はといえば、もちろん希望を捨てていない。というのも、「内在的視角」をもって農村に入れば、わずか数十年で壊滅的な打撃を受けた文化のただ中にもあってはなお、人々はこの文化の変化にその感情、思想、生き方を同調させているわけではない、ということがわかるからだという。土壌の中に深く根を下ろした数千年の民族の生活、民族の無意識、「郷土中国」（中国社会の文化全体）を内に秘めて生きるこの民族は、まだ自信を失っていない、文化と思考に対する追求はいぜんなされている、これが梁鴻の希望である。

私には、この希望こそが都市住民の覚醒（文化のせめぎ合い）を促しつつ、ポスト資本主義、ポスト経済主義へとつながる社会主義を見出していく礎となるように思われる。

最後に、社会主義論再考について一言すれば、社会主義を論じるには経済学ではまったく不十分である。特に、マルクス経済学の枠を超えた学際的な研究が求められている。

（松山大学名誉教授）